

農薬の登録内容は頻繁に変更されます。農薬は最新情報を確認して使用しましょう。
最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (<https://www.jpnp.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>) から。
農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (<https://www.jpnp.ne.jp/osaka/>)。

営農総合センター 指導販売課 072 (444) 8001



水稲

◆種もみの比重選と消毒

①種もみの準備
乾もみで10a当たり4kg程度用意する。

②育苗箱の消毒

育苗箱は事前にきれいに洗い、イチバン乳剤(5000～10000倍／瞬時浸漬または散布)で消毒をしておく。

③比重選

充実した種子を種もみとするため、比重選を行う(表1)。沈んだ種子を種もみとし、比重選後は十分水洗いをする。

④種もみの消毒

比重選の終わった種もみは水を切った後、網袋等に5分目程度入れ、薬液(表2)に24時間浸漬する。このとき、
・薬液の温度は10度以下にしない。
・浸漬中は1～2回袋を薬液中で揺すり、十分薬液が浸透するようにする。
・消毒が終わった後、水洗いは絶対に行わない。
・消毒後は水切りし、1日程度陰干しを行い、種子に薬剤をしつかりと付着させる。

◆浸種・芽だし

十分に吸水させ、もみ自身が

持っている発芽阻害物質を浸出させて、発芽ぞろいを良くするため浸種を行う。

種子消毒の終わったもみを水に漬け、ハト胸程度に催芽させる。浸種日数は、水温が20度では4～5日程度で、あまり水温が高いと発芽が不ぞろいになる。水は種もみの体積の2倍程度必要。2日くらい経過し、水が濁ってきたら静かに水を入れ替える。

◆は種

育苗箱に育苗培土を入れ、ムラなく平らにし、十分かん水する。1箱当たり催芽もみで180g(乾もみ160g)を均一にまき、種が隠れる程度に覆土する。出芽までかん水は行わない。

◆出芽

は種後、25～30度程度に2～3日保てるようビニールや保温シートを上からかぶせて保温する。育苗箱の積み重ねは、10～15枚程度とし、一番上には土を入れた育苗箱を置く。保温の途中、温度差による出芽ムラをなくするため、上下の箱の積み替えを行う。

◆緑化

出芽した白い芽に徐々に弱い光を当て、葉緑素を形成させる。

表3 なすの害虫防除に登録がある農薬

害虫名	薬 剤 名	IRACコード	希 釈 倍 数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
アブラムシ類	トレボン乳剤	3 A	1000～2000倍	収穫前日まで/3回以内	100～300ℓ／10a
	アーデント水和剤	3 A	1000倍	収穫前日まで/4回以内	150～300ℓ／10a
	アドマイヤー水和剤	4 A	2000倍	収穫前日まで/2回以内	100～300ℓ／10a
	モスピラン顆粒水溶剤	4 A	2000～4000倍	収穫前日まで/3回以内	100～300ℓ／10a
アザミウマ類	コテツフロアブル	1 3	2000倍	収穫前日まで/4回以内	100～300ℓ／10a
	モスピラン顆粒水溶剤	4 A	2000～4000倍	収穫前日まで/3回以内	100～300ℓ／10a
	アフーム乳剤	6	2000倍	収穫前日まで/2回以内	100～300ℓ／10a
	アルバリン顆粒水溶剤	4 A	2000倍	収穫前日まで/2回以内	100～300ℓ／10a
アザミウマ類	コテツフロアブル	1 3	2000倍	収穫前日まで/4回以内	100～300ℓ／10a
	アーデント水和剤	3 A	1000倍	収穫前日まで/4回以内	150～300ℓ／10a

* IRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。
※モスピラン顆粒水溶剤、アフーム乳剤、アルバリン顆粒水溶剤は、アザミウマ類で登録がある。

農薬の散布に十分ご注意ください！

平成18年5月より、農薬の残留基準値を厳しく規制する「ポジティブリスト制度」が施行されましたが、その後も、各地域で多くの事故が発生しています。
農薬の使用責任は生産者です。「安全・安心」な農産物を提供するために、農薬使用基準の順守は当然のことですが、農産物生産者のリスクを減らすためにも、生産履歴を必ず記載し、農薬散布の際には十分にご注意ください。
※家庭菜園でも、飛散による周辺農作物への影響がないかを十分ご確認の上、農薬を使用されるようお願いします。

しゅんぎく

◆病害虫防除

べと病の被害が増加する時期である。密植やチッソ肥料が多いと発生が助長される。は種量を減らして薄まきし、ハウスの換気を行い、多湿を避ける。適切な肥培管理に努め、被害葉はほ場に放置せずに、処分する。5～6月は、べと病の被害が多くなるので、発生前にはZボルドー(500倍／／)で防除する。ただし、散布後は白く汚れる。
* Zボルドーは、野菜類で登録がある。



◆こまつな

肥培管理

栽培期間が30日程度と短くなるので、前作の肥料の残存量を勘案し、施肥量は減らす。ハウス内では水分不足になると要素欠乏などの生育障害が出るため、土壌水分に注意する。また、露地栽培では栽培期間が梅雨にかかる場合、湿害が出やすいので、高うね栽培し、水はけを良くする。

◆病害虫防除

雨が多いと白さび病の発生が多くなる。薄まきを心がけるとともに、生育初期にランマンフロアブル(2000倍／収穫3日前まで／3回以内)を予防的に散布する。
*ランマンフロアブルは、非結球あぶらな科葉菜類で登録がある。



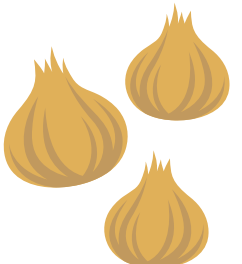
◆たまねぎ

収穫

収穫の目安は、葉が70～80％程度倒伏した頃で、天気の良い日を選んで収穫する。

貯蔵管理

風通しが悪いと病気が発生しやすいので、たまねぎの首部を早く乾燥させる。つり小屋では詰めすぎないようにする。



* 農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数／使用時期／総使用回数)を表示しています。

果樹

みかん

◆開花期の防除

訪花昆虫（コアオハナムグリ、ケシキスイ類）は、幼果にひつかき傷やリング状の傷をつける。また、灰色かび病は、果実にするこ状の傷をつくる。

8部咲き〜満開頃に、訪花昆虫に対して、ロディー乳剤（2000倍／収穫7日前まで／4回以内）を散布し、灰色かび病には、ストロビードライフロアブル（2000〜3000倍／収穫14日前まで／3回以内）を散布する。

また、昨年ミカンナガタムシの被害（半月状の成虫脱出孔やノコギリ状に食害された葉があれば要注意）があった園では、成虫の発生を認めたらミクロデナポン水和剤85（1700倍／収穫21日前まで／4回以内）を散布する。

*ロディー乳剤、ストロビードライフロアブルは、かんきつで登録がある。

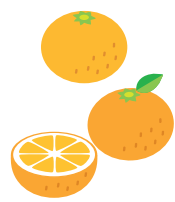
◆腹接ぎや高接ぎによる品種（系統）更新

ポイントは次のとおり。
①接ぎ木時に穂木と台木の形成層を合わせる。

②接ぎ木部への雨水の侵入、乾燥防止と穂木の固定のため、接ぎ木テープでしっかり巻く。

③活着後は、接ぎ木テープを破って発芽できない場合は、部分的にテープを破って発芽を助ける。

④複数発芽すれば、一芽だけ残し、風で折れないように支柱に誘引する。



もも

貯蔵養分による生育から、新葉の光合成による養分へと切り替わる時期であり、新根や新梢の伸長、果実の肥大が盛んとなる。そのため、新梢管理、摘果、袋掛け、病害虫防除と作業が遅れないよう計画的に行う。

◆摘果と袋掛け

生理落果の様子を見ながら、摘果は2〜3回に分けて行う。早生品種は、30〜80cmの長果枝に品質の良い果実がなりやすいため、最終的に長果枝の中央部付近に1〜2果、30〜50cmの中果枝に1果を残し、5月中下旬から袋掛けを行う。
晩生品種は、10cm程度の短果枝を中心に残す。残す割合は、

短果枝5本のうち1本に1果とるように行う。

◆病害虫防除

5月上旬に、黒星病や灰星病、うどんこ病の防除に、ストロビードライフロアブル（2000倍／収穫前日まで／3回以内）を散布する。

また、アブラムシ類、シンクイムシ類、モモハモグリガの防除には、モスピラン顆粒水溶剤（2000〜4000倍／収穫前日まで／3回以内）を散布する。ウメシロカイガラムシが発生している園では、コテツフロアブル（2000倍／収穫前日まで／2回以内）を散布する。

5月中旬には、せん孔細菌病の防除に、バリダシン液剤5（500倍／収穫7日前まで／4回以内）を散布する。

うめ

◆病害虫防除

黒星病は、老木での発生が多い。5月上旬に、ストロビードライフロアブル（2000〜3000倍／収穫7日前まで／3回以内）を散布する。

また、カイガラムシ類が発生している園では、5月上旬にモベントフロアブル（2000倍／収穫7日前まで／3回以内）

を散布する。

◆実肥

5月中旬に、10a当たり燐加安S403（14・10・13）を20kg施用する。

いちじく

◆芽かき

芽かきは、葉が3〜4枚展開する頃に行う。一字整枝で、せん定時に2芽残した場合は、次のポイントに注意する。
①上芽は勢力が強くなり過ぎるので取り除く。
②なるべく主枝に近い節の芽を残す。
③生育の早過ぎるものや遅過ぎるものを取り除き、生育をそろえる。

④果実へ十分日光が当たるよう、主枝の片面で結果枝が40cm間隔となるようにする。

◆病害虫防除

アザミウマ類の防除には、5月末から6月上旬に、デアナWDG（5000倍／収穫前日まで／2回以内）を散布する。

